

最も不良で、それぞれ 8.6%, 8% にすぎなかつた。このように不満足な結果の一大要因は、着床前の卵の損失にあると考えられる。

正常雄と交尾させた recipient への卵移植では有意な産児数の増加は認められず、recipient 本来の卵からの産児数が明らかに減少した。妊娠期間は 2.5 日卵→3.5 日子宮で特にのびる傾向がみられ、また移植卵からの産児の性比は雄に片寄る傾向がみられた。

## 綜 合 討 論

問 1. 下垂体を除去したものの雌で、卵巣腔のひろがつているものは、どれ位の頻度でみられたか。

(天沼 昭)

答 1. 実験個体数十尾の中ただ 1 尾にみられた。(吉倉 真)

問 2. 下垂体を除去しただけの雄と対照の雄との間に生殖巣の形態に差はないか。(宮森弘子)

答 2. 殆んど差はないようである。(吉倉 真)

問 3. 卵巣高温処理した時の精巣転換に関与する脳下垂体の役割は今のところどのように考えるか。

(中村 司)

答 3. その際脳下垂体が関係しているものと考えられるが、なお実験を要する。(吉倉 真)

問 4. 濾胞が lymphoid 化するメカニズムについて、どんな風に考えるか。(朝山新一)

答 4. メカニズムについては実験的な証明がないのではつきりいえないが、脳下垂体卵巣ホルモンの関係を考えて実験的にやりたいと思つている。(森田真一)

問 5. 正常雌の高温処理と脳下垂体除去した雌を高温処理した時の甲状腺の発達状態に差があつたか。

(中村 司)

答 5. 脳下垂体を除去した場合には甲状腺の発達は極めてわるい。(吉倉 真)

問 6. 排卵後 3.5 日の卵と子宮のコンビの時一番発生がうまくゆくのは、どういう原因によると考えるか。

(朝山新一)

答 6. 排卵後 3.5 日になると子宮は黄体の影響をうけて十分卵を受け入れるのに適した状態にかわる。一方 3.5 日卵も浸透圧その他の生理的变化によつて両者の生理的条件の一致によると考える。(吉田博一)

## 生 化 学・生 理

### (第 II 会場・第 1 日)

#### イワガキ (*Ostrea circumpecta*) の生体内におけるウリカーゼの分布

永瀬金一郎・高槻 俊一 (東京教育大・理・動)

イワガキの消化盲嚢は Folin 法によりウリカーゼ作用を有することが認められた。これは組織液を煮沸すると失活する。又  $10^{-5}$  M の青酸塩で可成り阻害を受け、 $10^{-3}$  M では完全に阻害される、至適 pH は 9.0 付近にあると思われる。これらのことからイワガキは哺乳類の類似のウリカーゼを有するものと思われる。酵素反応は適当な条件の下で一次反応に従うが、8~64 mg % の基質濃度では反応速度は略一定となる。酵素液ホモジェネートの濃度を  $1/15$  程度に高めると反応速度は低下してくる。以上のことから、イワガキ各組織の酵素活性を比較すると、消化盲嚢及びボヤヌス器官に著しい。生殖巣、腮、外套では著しくなく、往々全く認められない。labial palp, 閉殻筋, 胃, 腸, 動脈 (pericardial gland) には殆んど、或いは全く存在しないと思われる。ボヤヌス器官では尿酸がウリカーゼにより易溶性物質となつて排泄されるものと推察される。